

グラジオラスの穂やけ症は遮光や散水で軽減できる

[要約]

出穂期以降、60～65%の遮光または日中花穂表面に水滴がつく程度に散水を行うとグラジオラスの穂やけ症の発生を抑制し、発生程度を軽減できる。

農業総合センター園芸研究所

成果
区分

普及（情報）

1. 背景・ねらい

グラジオラスの穂やけ症は、切り花の商品性を著しく低下させるため現地で問題となっている。近年は、地球温暖化により穂やけ症発生が多くなると予想されるため、発生防止方法を開発する。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 遮光（図1）、散水（図2）、マルチ、蒸散抑制剤がグラジオラス穂やけ症の発生に及ぼす影響を検討した。マルチは球根植え付け時に張り、遮光および散水処理は出穂時から開花まで行った。蒸散抑制剤は出穂時に株全体が十分ぬれるように散布した。遮光は遮光率65%（平成17年度）または60%（平成18年度）の被覆資材を張りっぱなしとし、散水は散水チューブを用いて花穂部まで水がかかるとように設置し、8時～17時の間（平成18年度は9時～16時）1分間散水・4分間休止を繰り返した。
- 2) 遮光および散水により穂やけ面積率が小さくなり、穂やけ症が軽減される。また、両区では穂やけ発生も抑制され、穂やけの被害を受ける小花も少ない。マルチおよび蒸散抑制剤は穂やけ軽減効果はない（表1）。
- 3) 遮光により切り花重が軽くなる傾向がみられるが、商品性に大きな問題はない（表1）。
- 4) 遮光および散水により、気温および花穂表面温度が対照区に比べて低く推移する（図3）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 県内全域に適用できる。
- 2) 試験は穂やけ症が発生しやすい「マスカーニ」を供試した。
- 3) 散水によって花穂の隙間に水が入り込み、流通過程で蒸れや花シミが発生する懸念があるため、収穫後は花穂の水を十分に切る。

4. 具体的データ

表1 遮光、散水、マルチ、蒸散抑制剤が「マスカニー」の穂やけ症発生と切り花品質におよぼす影響（平成17年、18年）

処理区	穂やけ面積率** %		穂やけ発生率%		穂やけ小花率 %		開花日		切り花長		切り花重	
	積率** %		生株率%		花率 %		月/日		cm		g	
	H17	H18	H17	H18	H17	H18	H17	H18	H17	H18	H17	H18
遮光	2.2	0.4	87.5	40.0	10.7	12.7	8/11	8/19	127.8	121.8	141.6	96.3
散水	2.0	0.3	79.2	33.3	32.5	10.4	8/11	8/19	137.6	116.3	169.3	103.1
マルチ/蒸散*	14.4	1.9	95.8	75.0	77.9	44.4	8/11	8/21	120.4	115.8	159.0	93.8
対照	15.3	1.8	95.8	71.9	71.1	39.5	8/11	8/18	128.3	125.4	167.8	113.3

平成17年は6月1日、平成18年は6月8日に定植

*マルチは平成17年、蒸散（蒸散抑制剤）は平成18年にそれぞれ検討

**穂やけ面積率は下記の穂やけ指数に基づいて算出した穂やけ面積に穂やけ発生率をかけたもので、圃場全体の花穂穂やけ面積の割合を表す

穂やけ指数は、花穂上面面積に対する穂やけ発生面積割合を外観で判断して0：無発生、1：5%未満（面積2.5）、2：5～25%未満（同15）、3：25～50%未満（同37.5）、4：50～100%（同75）未満、5：100%（同100）とした



図1 遮光の様子



図2 散水の様子

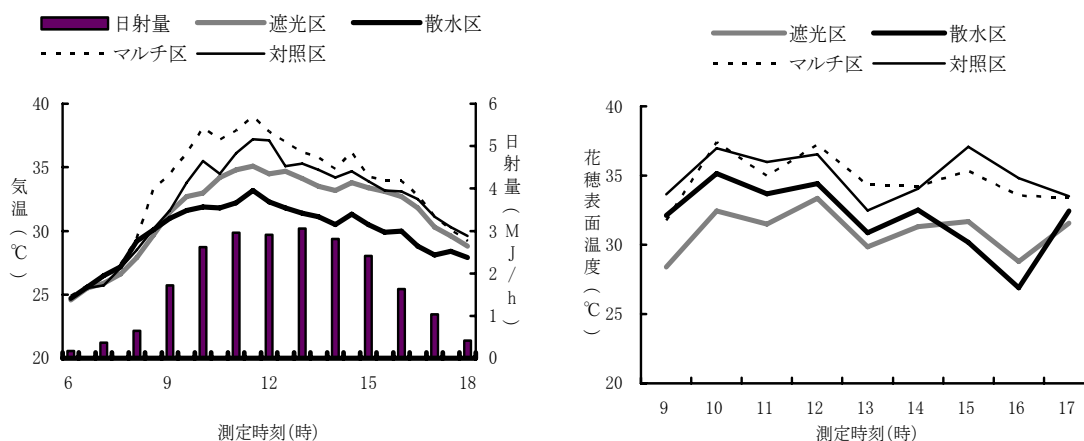


図3 日射量と各処理区の気温（左）ならびに花穂温度（右）の推移（H17 8/4）

5. 試験研究課題名・試験期間・担当研究室

グラジオラス穂やけ症の発生防止方法の開発・平成17年～18年度・花き研究室